



皆さん、絵本は好きですか？絵本には沢山の魅力が詰まっています。今年度は、絵本に関する書籍を活用しながら《絵本について》ちょこっとお伝えしていきたいと思います。



1月の絵本紹介

『このゆきだるまだ一れ?』

岸田 衿子文・山脇百合子絵・福音館書店

もみちゃんのそりから、うさぎさん、ぶたさん…と次々に落っこちて、転がって転がって、もみちゃんがみたらいくつかの雪だるまが！言葉のリズムも楽しく、また温かく優しい絵がいまって、冬の景色なのに、なんだかほっこり温かい気持ちになります。



『こうま』

小野寺 悦子文・たしろちさと絵・福音館書店

今年の干支は【うま】という事で、うまの絵本を紹介します。生まれたこうまの1日を描いた絵本です。生まれて立つ姿などは、つつい応援したくなります。うま年として、色々な事がうまくいく1年となりますように！（6月の絵本の為、景色が少し春ですが、そこはご了承下さい。）

【絵本の中の言葉は日常の会話とは違います。言葉の使い手が選びに選び抜いた言葉です。しかもそれを皆さんは自分の言葉として伝えているのです。絵本の言葉は全部読み手のもののなのです。作者のものではないのです。読み手の声で、読み手の言葉として子どもに伝えられていくのです。】

～『絵本が育てる子どもの心』松居直・日本キリスト教団出版局より～

絵本の言葉は、松居氏のおっしゃる通り選びに選び抜かれたものです。でも、それがそこにあるだけでは、子どもには届きません。その言葉を届けるのは大人の役割という事です。また、普段なかなか美しい言葉を使えていなくても、絵本を通して、大人も美しい言葉を使う体験ができます。例えば『くだもの』（平山和子・福音館書店）という絵本では、切った果物を差し出す場面で「さあどうぞ」という言葉が添えられています。とてもゆったりとした気持ちになれますよね。子どもが絵本を好きな理由の一つには、この事も関係していると思います。絵本を読む時、大好きな大人が優しい声で読んでくれる、となれば、その時間は幸せな時間になると思うからです。また、これは私の失敗談ですが、絵本を読む時に他の事が気になり、ただ文字を追うだけ…で読むと、子どもはすぐに絵本に飽き、離れてしまった事があります。それだけ、子どもは敏感に声から感じ取っている、ということを感じました。せっかく美しく選び抜かれた言葉でも、読み手によってダメになってしまう事もあるのだ、と気がきました。絵本を読む時は、しっかり心も向けて、素敵な言葉を届けていきたいです。

